

ウィトゲンシュタイン『心理学の哲学』におけるアスペクトと想像、および知覚の関係

梅村翔子(東京藝術大学)

本発表の目的は、後期ウィトゲンシュタインがもちいる〈アスペクト〉の概念を精査することを通じて、彼の言語ゲーム論の枠組における知覚論および想像の役割を示すことである。

アスペクトとは『心理学の哲学』と名づけられた一連の草稿に現れる知覚および想像に関わる概念であり、一般にある対象の見方、相貌を意味する。たとえばアヒル-ウサギの頭の図のような両義的図形において人が見方を変換することを、ウィトゲンシュタインはアスペクトの〈閃き〉と述べている。その主要な問題は、彼がアスペクトの概念は想像の概念に似ているとしていることから、アスペクトもまたカントやヒュームが考えたように知覚そのものの成立を支える想像力の概念に匹敵するものではないかと推測されうるといふ点であり、また思考と知覚の間におけるその概念的な位置づけである。ウィトゲンシュタインはこの問題に腐心したが、結果として思考にも知覚にも還元できなかったということが読み取れる。しかししばしば見受けられるのは、一般的な知覚と、判じ絵が提示するような見方に対して意識的な知覚(アスペクト知覚)の関係を、〈見る〉に対する〈……として見る〉とする定式化である。たとえばN.R. ハンソンは『心理学の哲学』の記述をもとに、すべての〈見る〉には〈……として見る〉が含まれていると述べた。この解釈はアスペクトの概念をヒュームによる拡張的な想像力の概念により接近させたと言える。しかしそうした解釈とは裏腹に、ウィトゲンシュタインは明らかに言語ゲームの枠組みを知覚論にも類比的に活用していたようである。

本発表では以下の手順によりこれを示したい。まず第1節においてアスペクトの概念と親密な知覚とのその関係について考察する。あきらかにウィトゲンシュタインはすべての知覚に〈……として見る〉形式が含まれていることを否定しており、かつ、〈……として見る〉が思考であるということも否定することで感覚与件論を斥けている。第2節では、アスペクトと想像の関係を扱う。ウィトゲンシュタインの考えでは、知覚は本来にある種の論理形式(有機性)をそなえている。これに対して傾向性が心理的に私たちのアスペクトを方向づける。想像はこのとき、合理的に私たちのアスペクトを律するものとして考えられていたようである。第3節では、〈アスペクト盲〉という仮想的な存在から想像の役割を明確化する。アスペクト盲はアスペクトを想像的に捉えることを欠くが、ウィトゲンシュタインはそのような人でも知覚は十全であると考えた。それゆえ、言語ゲーム論の枠組みにおいて〈……として見る〉は知覚に必然的に宿るものとはならない。知覚論においてウィトゲンシュタインは私的言語論と類比的に捉えられるような、対象を盲目的に把握するある種の知覚形式の存在を容認しているといえる。